

女性アスリートの報道と社会における女性像との関連性

1K09B071 栗林 純子

指導教員 主査 リー・トンプソン先生 副査 石井 昌幸先生

【目的】

某テレビ番組に女性アスリートたちが出演し、番組が用意した食べ物に群がるシーンが放送された。現代では何の違和感もない光景だが、数十年前の日本ならば「はしたない」と非難の対象になったかもしれない。女性の在り方は時代ごとに変化してきているように感じる。本研究では女性の在り方の変革期ともいえる 1980 年後半の社会における女性像を同時代の女性アスリートの報道から分析することで、今日の社会における女性像の問題を明らかにするとともに、これからの女性像について展望することを目的とする。

【方法】

序章では本研究の社会的背景や目的について言及する。第一章では森田の文献の中に出てくる典型的なスポーツヒーローの例に基づき、メディアのヒーローが社会におけるイデオロギーや価値観を反映した理想像とリンクしていることについて述べていく。第二章では社会に求められる女性像とはどんなものなのかについて、関連文献を参考に具体的に分析していく。1980 年代後半に女性の在り方が変化した要因として男女雇用機会均等法により女性の社会進出が進んだことを挙げ、労働と女性の関係性について述べるとともに、メディアにおける女性アスリートのステレオタイプな扱われ方の例を取り上げていく。第三章では男女雇用機会均等法前後のオリンピック（ロサンゼルスオリンピックとソウルオリンピック）における女性アスリートの報道の内容分析と、その結果から考察を行う。第四章では実際の新聞記事から女性アスリートが「女性らしい」役割で書かれている記事を抜粋し、その記事のどんな点が問題であるのか、社会におけるどんなイデオロギーや価値観を反映しているのか、それが社会にどんな影響があるのかについて分析していく。終章ではここまでのまとめとこれからの女性像について展望する。

【結果】

関連文献からどの時代においても共通する「女性らしい」役割が存在することや、それが女性アスリートに対する報道に顕著に現れていることが分かった。また内容分析からは女性の在り方というものは少しずつではあるが、変化していることが分かった。アスリートの形容表現においては、1984 年ロサンゼルスオリンピックでは女性アスリートの女性的役割記述が 52%だったのに対し、ソウルオリンピックでは 25%に減少していたことや男性的役割記述が 4%から 16%に増加していたことに顕著に表れている。しかしながら 1988 年の記事の中にも女性アスリートのステレオタイプな扱われ方というのは数多く存在していて、なかでも、強い女性ほど弱く、小さく見せられる工夫がされている記事が多かった。

【考察】

内容分析の結果から、関連文献において伝統的に「女性らしい」とされるイメージ通りに書かれるアスリートは少なくなり、社会的にも「男性らしい」とされるイメージを持ち合わせる女性像が認められるようになってきた。一方で、メディアでの女性アスリートのステレオタイプな扱われ方においては、「強い女性ほど、弱い一面を強調される」という傾向は色濃く残っており、金メダルを取ったり、「男性らしい」スポーツに携わったりしている女性アスリートは、功績を讃えられながらも、主婦である点や、涙を見せる描写が取り上げられていて、「女性としての役割」を果たしていることを強調されているようだった。今後日本では女性の社会進出が進んでいき、メディアでも活躍する女性が増えられられる機会が増えていくだろう。しかしそれは同時にステレオタイプな「女性らしさ」が取り上げられる機会が増えることも意味している。ステレオタイプな「女性らしさ」のイメージを脱ぎ捨てるにはまず、我々の価値観やイデオロギーを変えていかなければならない